

戦死した父への思い



長久手市池田
水野 和子さん

私が六歳のとき、父は戦地に出征しました。昭和二十年の寒い日でした。長湫景行天皇社の前で送別のあいさつがあり、父は村の人々に日の丸の旗で見送られ、オート三輪車に乗って名古屋の方へ行っていました。

召集令状の赤紙が自宅にきてから出征の前日まで、父は、家の周りや離れ、米蔵を一生懸命に掃除していました。これが父との最期の別れと感じたのか、私は父のそばを離れることができませんでした。父は、近所の人に「留守にしますので、家のことを頼むぞな、頼みますぞな」と頼んでいました。父が出征してしばらくすると、アメリカ軍の大型爆撃機B29の空襲が激しくなってきました。ある夜、防空壕から出て、西方の名古屋を見ると焼夷弾爆撃による火災で、空一面が真っ赤になっていました。

当時、私たちは国民学校(現在の長久手小学校)に入学し、一、二年生は、近くの分教場で学びました。空襲警報が鳴ると、必死で下校することが度々ありました。また、自宅の近くの県道を日本軍の戦車が轟音を立てて走ることもあり、怖くて近所の

麦畑の中に身を隠し、やり過ぎた記憶があります。

ある時、現在の名古屋市長久手区藤が丘付近にB29が墜落し、現場に見に行きました。そこでは、機体が散乱し、我慢できないくらいのお臭が鼻を襲いました。また、アメリカ軍の兵士の遺体もあったようです。

夏になった昭和二十年七月中旬、父の戦死の公報が自宅に届きました。亡くなったのは、七月二日と記録されていました。父は、母と私たち兄妹三人、それに祖母を残して三十六歳の若さで亡くなったのです。母は、公報を見て縁側で泣き崩れました。後日、父の戦友の話によると、九州の筆立山の弾薬庫入り口で、艦載機の機銃掃射で撃たれたそうです。父は、弾薬が大量に保管してある弾薬庫の中に入ると危険と感じ、弾薬庫の入り口にいたと



聞いております。父の戦死で、母子家庭となってしまった私たちの生活は大変なものでした。祖母は、非常に落胆し、病に伏してしまつたのです。母は、生計を立てるため、リヤカーに野菜を積み、長久手から名古屋の大曾根まで、早朝から行商に出かけなければなりません。当時は道路が整備されていなかったため、本当に一日仕事でした。私たち兄妹も学校が休みの日には、母の手伝いで名古屋まで行商に行きました。苦しい時、もし父が生きていたらどんなに幸福だろうかと何度も思いました。天国の父が助けてくれたのでしょうか、おかげさまで今日まで、生きることができました。

これからは、戦争によって、私たちのような母子家庭の悲しい思いを誰にもさせたくありません。子供や孫が、戦争に行かなくてもよい平和な世の中になってほしいと切に願っています。



整備された弾薬庫

現在の想い

水野 和子さん

今年の四月、父が戦死した門司市の筆立山に、家族で慰霊の旅に行きました。門司に着いた夕方、最上階が展望台になっている門司港レトロハイマートビルに上りました。東窓面に夕日に輝く新緑の山が見えたので、展望台の店員に山の名前を聞くと、その山が筆立山でした。予期せぬ導きに、家族三人は筆立山に向かって合掌しました。艦載機に撃たれた父が、じっと私達を見ているようでした。

翌日、福岡在住の知人の案内で筆立山、古城山、父が死んだ第一弾薬庫を訪れました。弾薬庫は整備され、周辺は駐車場と公園になっておりました。公園の樹木に長久手から持って行ったボトルの水をかけ、父の安らかな眠りを祈願し、慰霊の旅の願いが叶いました。

戦後七十年記念誌「平和への願い」に掲載して頂き、有難うございました。